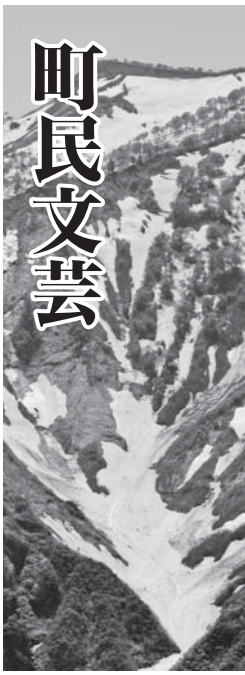

只見短歌会　四月詠草

大塚栄一　指導

雨止みしも一入寒き本堂に合同法事の続経に手合す　馬場　八智

一本の釘を打つのをためらひて木目美しき柱を撫づる　小倉キミ子

友逝きて空き家となれど雪解けの庭に花芽の数多芽吹きぬ　渡部ゆき子

頂きし歌集にひと言記されしひとつの言葉に胸を打たれぬ　関谷登美子

入退院繰り返しゐる老い母は過去の作品を纏め始めつ　新国由紀子

花殻は風に微かな音立たつるあじさゐの下いちげ咲き満つ　目黒　富子

一日の時の流れの早く過ぎ手帳の中は空欄多し　渡部ヨリ子

一人居の友の入院長びくか囲ひしままの木々は芽吹くに　古川　英子

寒冷紗掛けゐし裏庭の鉄骨が十余年経て錆しまま立つ　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　五月例会

目黒十一　指導

曾祖父に似ける鼻梁や風光る　吉児

焼き米を頬張る童草萌ゆる　恒夫

水仙や花道六方踏みながら

夏の風邪ふたり暮しのご器洗う　レイ

答ふには遠き山波閑古鳥　さちを

万有の力を知って蓮の露　信

冷奴支柱の並ぶ畑見つつ

風薫る鍬に己が名使い始め　一穂

水温みわっと飛び出す幼児かな　信

ゆらゆらと見上げる空や朧月　都

ふれ太鼓ひきよせられて国技館

車窓より右も左も麦の秋　修一

一羽二羽雀来たるや春時雨　都

雪代やゆびそ柳は首を振る　味代子

月光に微かな反射白木蓮

春の風取り込み朝の食事かな　敦子

行儀よくいつに植えたかクロッカス　味代子

春雷や通り抜ければこざっぱり　弘子

片栗も咲いたと便り出す朝

若葉風歯科医の声のやわらかき　敦子

思いっきりぶらんこ漕ぐ子若葉風　弘子

老杉を覆いかくして藤の花